



社会教育担当 村重 勝也さん

新年あけおめ、ことよる(笑、いやあもう古いですね!)さて、正月らしく夢のある話を...

いきなり個人的な話で恐縮ですが、幼いころから新し物好きでSF小説に親しんだ私は世の中にパソコン(当初マイコンと呼ばれた)が登場してかれこれ40年以上、友人には電子機器マニアと呼ばれてきました。

自分では特にマニアやオタクの域ではないと信じていますが、それでも買い替えたコンピュータに使ったお金を安い車が3、4台買えたでしょう。

で、この間コンピュータの処理速度はまさに天文学的と言っているほどの進化を遂げました。処理速度はこの40年で100億倍、と聞いても想像しにくいと思いますが、アポロ11号を月に着陸させた時のNASAのすべてのコンピュータを合わせて

も、今のスマホ1台の能力の足元にも及ばないのです。

ところがそんな私が幼少時代に空想していた2020年の姿と比べると、50年経った今の社会は実は思ったほどには進化していないような気がします。当時の未来図では、車は当然のように無人運転で空を飛んでいたし、鉄腕アトムのようなロボットがどの家庭にもいて人間を助け、誰もが月世界旅行に出かけていました。

確かに今、携帯電話は当たり前になったし、無人運転車もようやく実現しただけで、街で見かけるペッパー君はアトムに比べるとまだまだできそこないに見えるし、車ではなくやっとドローンが飛ぶレベルというのはあのころの空想の世界に遠く及びません。

しかしここにきて、ようやくかつての空想が次々と実現する時代が始まるようです。さまざまに分野で今まで越えられなかった壁が崩されてい

ます。その中心技術がAI、いわゆる人工知能です。

数年前から「シンギュラリティ」という言葉が話題に上り始めました。これはごく大雑把に言えば、人工知能の能力が全人類の知能を超えてしまう地点の事で、言い出さずのカーツワイル博士によると2045年だそうですが、もっと早くなるという人もいます。

そんなことって本当にあるの?と思う人もいるでしょうが、今やコンピュータが目と耳を手に入れ、人間と同じ仕組みの学習が可能になった以上、それはおそらく時間の問題です。

人は学習するといつても眠ったり気が散ったりするし、もともと脳細胞の数%しか活用できてい



ないわけですが、人工知能は眠ることも気が散ることもなく、フルパワーかつ年中無休

で学習を続けられるのでそこからそりゃあ勝負になりません。詳しく書けません。画像認識とディープラーニングで進化するAIは、社会のすべての分野、あるいは人間そのものを大きく変えてしまうことになるでしょう。スマホやスマートスピーカーに普通に話しかけるとちゃんと返事をしてくれるようになったのは、そのほんの幕開けなのです。

ドローン宅配や音声の同時通訳など身近な技術革新から、医療分野なら発症前の病気予測から遠隔手術まで、AI技術の進歩はまちがいない人の暮らしを大きく変えますが、それも加加速度的進化を考えると当然そんなレベルでとどまりません。

例えば農業では、農場をすべてAIに管理させる実験が進んでいます。カメラとセンサーが気温や天候など環境データはもろろん土壌や作物の状態を解析し、雑草はロボットが排除、病虫害を検出したら自動で対処し、施肥の量もタイミングも

最適化され、収穫は最高の状態を選んでロボットが行う。経験と勘と匠の技と運に頼ってきた農業は激変するでしょう。AI技術が無農薬、有機栽培の可能性を高め、本来の栄養価、美味しさ、安全性を犠牲にしない、自然の力を最大限に活かした真に持続可能な農業を可能にしてくれるのです。



そんなわけで今や地域おこしにもまちづくりにもAIの視点は不可欠です。ただ、それをどう生かすかは、実は人間の幸せとは何かを考えることを抜きに語れません。そうでないといずれAIは人類を滅ぼすと考える人だっているのです。

(それより核戦争で滅亡する方が先かもしれません) 私は、ロボットやAIの時代だからこそ、本当は、山並みを照らす美しい夕陽やのどかな田園風景、静かで真つ暗な夜にキラキラ輝く満点の星空、薪ストーブに揺らめく炎の色などが人間にとっての真の宝物なのではないかな、とこっそり考えています。



移住・定住担当 野口 崇さん

【今年の所信】 皆様あけましておめでとございます!

移住・定住サポートの野口です。2018年は自分の考えている「住まい」に関する活動を実際に長沼町で実践していこうと思います。そのために現在各所に相談をしている段階です。雪の解ける頃に具体的

にお話しできるかと思えます。地域おこし協力隊としてお手本になるような華やかイベントや教科書通りの活動は考えていませんが、地道に継続した活動をしていきたいと思えます。



【ある集落にて】 雪の降り始める前の話です。修行先(不動産屋)でお客様からカフェをやっているお店を貸したいと連絡があったので物件の状況聴取と物件写真を撮ってきてほしいと依頼されました。

場所は札幌市から車で2時間半かかる場所。日本海の荒波が眺望できる眺めのいいカフェでした。周辺を見ると30戸程の民家と漁港があり物悲しい冬の日本海沿いの漁村の風景が広がっていました。

そこには人通りが全くありません。お話を聞くとこの時期は2戸程しか

人が住んでいなく夏でも5戸程しか人が住んでいない状況だそうです。

住んでいた人がより便利な町に移り住んでしまいい、家が放置状態になっているようでした。

これらの空家も誰にも知られず日本海の風雨にさらされ朽ちていくことを想像すると自分自身に何かできることはないのか?と自問自答する反面、営利的に考えると多くの人が尻込みしてしまうのではないかと想像できます。

そういうことをプラスに換えられるようなアイデアを生み出せるよう、苦悶苦闘しながら修行の日に努めています。



グリーンツーリズム・地元産品担当 坂本 一志さん

【グリーンツーリズム体験記2】 先月に引き続き、グリーンツーリズムで滞在する生徒の生活を紹介します。

3. 農作業体験

いよいよ、グリーンツーリズムの中心となる農作業体験です。その魅力をここで書き尽くすことはできませんが、特に印象に残ったことを中心に紹介します。



ネギの皮むき

農作業体験は、各種作物の植え付けや収穫、キュウリ、トマト、ナスなどの細かい管理など、作物そのものに対する作業のほか、草むしり、機械整備、ほ場清掃、ポット洗浄、収穫が終わったハウスの整頓などなど。どれも、店頭で米や野菜を見ているだけでは想像もつかない作業です。

また、季節によっては精米、野菜の選別や袋詰め、箱詰め、ラベル貼りなど、流通・販売につながる作業もあります。

本州では見られないビート、関西で一般的ではない軟白ネギなどは、



ビート収穫

北海道農業や日本の食文化の多様性を学ぶ機会になるのではないのでしょうか。作業の間には、トラックや農機に乗っての記念撮影や、自家用のイチゴやブルーベリーをその場で味わったり、スイカ割をしたり。出荷されてゆく青いトマトとその場で食べる真っ赤なトマトは、生徒たちにとって新鮮な驚きを与えることとでしょう。

(つづく)